

ジャン・エシュノーズ著 谷 昌親訳

『ピアノ・ソロ』

集英社 二〇〇六年

清水重夫

(1) 英米、アイルランドの小説は少しは読んできたものの、フランス文学については古典のいくつかを讀んだだけの私が、無謀にも現代のフランスの小説家で、名前も初めての存在であるエシュノーズの作品の書評を引き受けることになった。

谷さんの解説によると、一九四七年南仏に生まれた彼は、現在まで小説は一〇作品書いていて、日本語の翻訳もいくつもあり、前作の『ぼくは行くよ』（青木真紀子訳、集英社）は一九九九年のゴンクール賞を受賞した。

その作品群の中に、今回谷さんの翻訳が加わったことになる。谷さんによると「エシュノーズの長編小説は、複

数の主要人物が交錯し、章ごとに交互に別の人物が登場するといった、あたかも映画におけるクロス・カッティングを思わせるような構成を特徴としてきた」ということで、ナラティヴとか筋立てとかについて、いろいろの工夫をする作家のようである。ただし『ピアノ・ソロ』では主人公に沿った直線的な構成となっていて、これは最近のエシュノーズの傾向となっているということのようだ。

書評の第一の目的は、たぶん粗筋の要約、紹介であろう。翻訳で一七九ページのこの作品は中篇と言っている長さだが、全体が三部、二九章に分かれている。登場人物は主人公のマックス・デルマルク、五〇歳で著名なピアノの演奏家、独身、パリの高級アパート住んでいる。別の階には妹のアリスが住んで時々食事の世話などをしてくれる。彼を取り巻くのはマネージャーのパリジと世話係のベルニー。演奏家としては一流なのだが、舞台恐怖症で酒依存症、毎日が演奏で明け暮れる。彼にはローズという恋人がいたが、三〇年前に別れて、今でも再

び彼女に会うことを夢見ている。地下鉄の駅で彼女に会いそうになる章もある。そうでありながら、散歩で会う犬を連れられた婦人と親しくなる。マックスは語り手によるとあと二二日で死ぬことになっている。パーティの場でローズに似た婦人を追って外に出て、刺されて死ぬ。

第二部は死んだマックスが、センターに寝ている。死んだ人間が治療を受けて再び別の人生に出てゆく前の一週間を過ごす場所である。ベリアルという担当マネージャーとディーン・マーチンそっくりのというよりどうやら本人のようなディノという世話係、ドリス・デイにそっくりの看護婦がいる。第八章は「ドリス・デイとの愛の一夜」という一行だけの章。マックスはこれからの生活として、都市と田園の中から選ぶことになる。気に入っていたのは田園での生活だったが、都市の生活の方が与えられる。

第三部は急展開の筋立てで、センターで傷の治療を受け、整形の手術を経て顔の表情を中心に身体全体の様子が変わり、名前も変わったマックスが、南米のイキトス

というアマゾン河畔の町で一週間を無為に過ごす。退屈と金欠になったところで、品物をパリに運ぶ仕事を割り当てられ、パリに戻る。別の人物になっているから、住むホテルとバーテンの仕事が与えられる。音楽家としての仕事には就けないことになっている。そこでホテルのフロント係の女性と関係ができ、一緒に住むことになる。やがて彼女との生活に退屈したときに、昔の世話係のベルニーと会う。彼だけが、彼がマックスであることを見破り、ピアノ演奏の仕事を紹介する。そこへセンターに嫌気がさして人間も変わったベリアルが現れ、一緒に住むことになる。二週間前の犬を連れられた婦人とも会う。そして最後にプランタンでローズに出会う。ローズはマックスの存在を認めながらも、ベリアルと連れ立って離れていく。ベリアルは、都市の生活はこういう筋立てになるという言葉を残す。追いかけてみたが、彼らを見失うマックス、でこの小説は終る。

(2)『ピアノ・ソロ』は三部構成で、第一部が音楽家としての現世そして死、第二部は死後から再生へのトラ

ンジットの期間、第三部は再生後の現世の生活という構成になっている。構成についてはダンテの『神曲』との関連、ホーマーの『オデッセイア』との関連などが批評家たちによって論じられているようだ。

アイルランドの作家ジェイムズ・ジョイスの『ユリシイズ』はその意図の一つとしてホーマーの『オデッセイア』を下敷きとしていることは知られている。「テレマキア」「ユリシイズの放浪」「ノストス」の三部構成になっているこの小説は一九〇四年六月一六日のダブリンのユダヤ系のアイルランド人レオポルド・ブルームを主人公としている。モダニズム、ポスト・モダニズムの小説として、ナラティブを始めあらゆる技法の工夫がされていて、いわゆる「小説」の集大成となっていて、二〇世紀最大の小説といわれている。以後の小説は何らかの形で影響を受けていると考えられる。『ピアノ・ソロ』三部構成についても第二部がオデッセイアと同じ彷徨であり、第三部の主人公マックスの変身は『オデッセイア』でのイタケーに戻ったオデッセウスの変身と一致する。

ただしホーマーの叙事詩では、城に戻って、オデッセウスは妻のペネロペーの求婚者たちを殺し、最後は一八年前に夫婦が再会するが、『ピアノ・ソロ』のマックスはローズと再会しても何も起こらない。エシュノーズは再会に意味をこめていないようだ。音楽についてもジョイスは第一挿話で十分扱っているが、エシュノーズは主人公を音楽家にして、その演奏家としての実際について彼の演奏する曲目に言及したり、敢えてミスタッチという技術的なところまで踏み込んでいる。第一部で公園を歩いて音楽家たちの銅像にマックスが嫌っているとこるも描かれるが、パリの街を歩くことと、ジョイスの作品の人々がダブリンの町を歩くこと、そして歩きながら見る、通りの持つ意味を語り手が語ることにしても共通点が見られる。

ジョイスとの共通点を論じていても始まらないようにも思えるのだが、この読み方でエシュノーズの作品を楽しめるし、彼独特のものを発見することでもっと楽しめる。音楽に関するエシュノーズの蘊蓄はピアノの演奏家

としてのマックスの仕事の描写で随所にあらわれていて
楽しめるし、第二部のディーン・マーチン登場で、『リ
オ・ブラボー』を何度見たかわからない私にとってはこ
れも楽しんだし、ドリス・デイに対する感じ方もあらわ
れていて『ケセラ・セラ』のことを思い出した。

第三部でローズを見失った後のマックスの行方とか、
語り手の存在とかについてもエシュノーズは何も言っ
ていないのだからオープンにしておけばいいのだと思
うが、気になるところだし、このあたりが彼独特のもの
だろうと思う。そしてこれはジョイスと共通の点だと思
うが、ユーモア、皮肉などが、彼独特のタッチで描かれ
て、ともかく楽しく読めた。また谷さんの翻訳はマッ
クスに合わせてちょっと古い感じの日本語になっ
て、これも面白く読めた。